絵[illegible] 全

イ 曽 4
600
186

祢さめのすさひ 上

石川雅望輯

姓氏の篇の説に（百人一首うひまなひ）壬生をミふとよみて壬ハ水の意なりとおもへる後人のわざ也 新撰姓氏録の羽延喜の頃丹ふのよしさねおほやけの役をつとめぞいはへぐのよしをさずけいりまとさすれハ和名抄に土佐国安藝郡丹生郷 筑前国上座郡壬生郷とて丹生ハにふとよみ壬生とかけるとも爾布とあり壬の字音にてすれそ丹の字とかはりにてかしかるむ丹生ハ赭土（ソホニ）のある所をいふされハこまれかくまれにふといふへきなりといへり

今按するにこの説ことわりあるに似たれと猶さる

一 姓氏ハ国々にわかれおほくの人の子孫

うけつぎてよゝぶのなれバいろきこえたる世なり
もおのれが姓氏の称号となへ呼するつきもあんや
ひかれる和名抄ニ土佐国安藝郡丹生ハ尒布と
よませり而儀なり筑前国上座郡壬生ハ尒布
と注せしハ未を尒とうつしたるなるやあらむ
新恒集の詞書にふとありも今のおハあや
まりのゝおほりれハこれをとりて姓とふたりし今
考ふるに拾芥抄耕子或書云延暦十二年正月甲
午遣使於山背国葛野郡宇多地ニ為遷都也始
造ニ山背新宮ニ同年六月庚午令ニ諸国造ニ新宮
諸門ニ尾張美濃二国造ニ殷富門ニ伊福部氏也
越前国造ニ美福門ニ壬生氏也若狭越中二国造

安嘉門ニ海犬甘（アマイヌカイ）氏也丹波国造ニ偉鑒門ニ猪養氏
也但馬国造ニ藻壁門ニ佐伯氏也（これより下拾芥抄今不用おほし同書中末詳門號）
（起事とのふ合せ考へし）この拾芥抄にひける書いかなる書にやさる
めてたゝるへし今の山城の京に都うつしまつる時
国々におほせて御門をつくりしめたまひさせその
つくれる人の氏をとりて佳字をかへて門號とな
しひたまへるにむこれ美福門とつくれる人の氏
壬生なれハ壬生と尒布とハよむへきなる
あまりかなりともしし
いせ物語拾穂抄に古注をひいてあいひ
土をとかれハまとといひつよつハ在子なり十と
いひつよつを大四年よかしあれそも只ハ四十年ね

なひさるものことなるを下の弟子をいふと推量
あれとしとしるせり
今案するに十四年のかにちとかゝるさや蜻
蛉日記子道綱の母の道綱のをさなき比乃
ことかきつへゝ不了かくて人ふくろぬさ母まて
となどといひてひとつふたつのとしはあまりにけり
とありいせ物語にもしも見とはかなくし
源氏物語なとこそのきにおほやけちかくちかく
とあると古注には公方のおほつかさくそこらつを
ことしるせり
按するにおほやけの下につきてそふてるとおほ
やけそこらとは〽しもおほやけすてのる

ともいふ倭玉篇といふ此の類子なとにしるしたりと
おほかる故弟子にもらしたけにあるなりてねかへる
を見すてゝいさゝかなることをすへしあさましおほやけ
そこらにてはんれくのこゝろもこそあらんとそ
あり又紫式部日記子紫の中将の男といふ人
侍りし史記侍る後みゝて人のやむことなかりしを
文をとられける人ありてこゝろを侍しいとよくよむを
われのゝ世子ハよしあしのゆるしなくさとひは
おほしすくてよの人ハこゝろもてしろきやうに
なりひて侍つかはる見侍にすへくろまころやま
しろしおほやけちかくとろなしぬ人のいふやうに
にくむこそおもひのそくられしなると見ゆめり

旧きハこめきてとあるを古注ハ巨めきてくと
あり賀茂翁の新釈ニハこめきてハ人のむすめ子
めきて物ちかきをいふと注せり
梅月子云つほみ細園ゆつりの文子四十子
ひらつふらつきねしいとあてそかにこめきて
云々とあり四十そらりの女とさして女子めきて
といひんハいかてあらんか猶考へし
つれ〳〵草子云則子額かくることつたふハよろし
からや勅額由木路の二示禅門ハ額かくるまし
のゝましき見物の残あらてもよろしぬからや注そう
うるさき春のことしさん志きかまへするをいふへし
この文子てハ残あらていふハ四つゝを供め

されと古書ニ志つかけるもあり。それ梅院
落京男きし七月七日ニなりぬ賀茂川ニ行
くすゞしき大家よりもちめくそれよりつゝく
こゝてもらちかまて出のへり賀茂川のほとりニ
さきさはらちてことこ男しまちおもそし
云云ニ何らの文をとる兼好ハふとワすれたる
るへし
旧書ニ隠倉の海ニかゝるそしいふ奥ハかめさるひ
ニハ在たるき物まて此注ちて身物しそれも
隠倉のむしよりゆ仲ハ此奥おの行るワすし
世まてハそらく志きき人のもとへ出すを仰くさ
アときき云云

これを徂徠翁の延喜式をひきてこれら
れしハことわりし古来の陣鳥ゟ子の説ハ
人の志るところなり今按ずるに類聚三代格ニ
一ニ太政官府定準犯科祓事一大祓
料物二十八種馬一匹大刀二口云云酒
六斗米六斗稲六束鰒六斤堅魚六斤
云云なるといふ也諸国よりのまつりにあげ
てられかゝるとつねやきのあそびとなり賦
役令ニ煮塩年魚四斗煮堅魚二十五斤
堅魚煎汁四升註ニ謂熟煮汁曰煎
とあるしたり俗ニダシといふもあり煮堅魚
とハかつをのことをいふなるべし三代格ニ

志るせるハ賻ニ志るさるゝをとふこつ原ニ見えし
ハ生るるものにやいつれもいまだくはしく貴るる
のこまくニ調し出せるをあまねけしまして
隠岐の海ニとれたるかほりのなハなき
ゞちゝやのかれし山家集ニいそこさきニかつを
つりふねならびうきてはかともえさり續日本
紀ニハ堅魚とあるとつきし人もしらいつれも
いまくよりよにりてそやせしあるそれ有なる
演義三国志九十五回ニ武侯弾琴退仲達
ことを志るせり
この作よく人の志れるところし陳壽が三国志
ニハ委さしく稗史をつてれるものにいつ

もりてきるすり天録閣外史よいそく字ハ黄憲
叙度か作るところしと 有巨盗攻冥阨之関、一郡大恐、
居民逃匿、而無所帰、賊有司馬龍者、
力敵三軍、勇冠百萬、懸千銭千百歩
之外、箭削九發而九破、以此擅與時群
盗將陥関、司馬龍曰、吾聞郡有黄叙度、
未可攻也、結営於関外云云 徴君鼓
琴帳中、司馬龍聞之笑曰、此必叙度
作闘態也、吾知其弱矣、遂攻関門、賊
衆曰、闘不撃折、而鼓琴、此詐也、内必
有伏、且勿攻云云 といへるくだりの賊將の
姓を司馬といへるより仲達のことにさして

孔明かたそらりのふるきといひんとぞあら
ぬをもとつくれるなるべしあんありける
市井のあやしきすみ主人をさして親方とよ
ぶなり
あけ甚の巻に例のかろくちあるるれいはなき
・みぬ物たりそやもとめて心あるしくるへかれなを
おやかくてなりて他めへぬふ又曽我物語に
三浦別當か妻ハ曽我十郎かあね子ハ姨
なりけるか別当かめしつかひけるかさかひ
といへる女を十郎かもとへやらむとてあまく
のことかきらし腹にいそく親かしのかへる
なりかけてりやうのにてあるまとハ弟かも

志もつけの母ハ乃ぬとのゝ云云 案するに
兄伯母なるの歌をそへ給ふとて親子此を
つらき者の心思 親がらといへるをいへ母ハ轄志て五
人をもつれなしときこゆるなるべし
源氏物語の注者の詞に凡四書五經ハ人の身に
居くして仁義の道に入らしめんや女房子とき
のためにこそ作益あらしされハ先人の身にちかく又
人の好所の淫風を云あらハして善道に縁とて
中庸の道に引入給ふハ中道實相の世に於て
入へき方便の權教なりきとある人の説に此物
語はつねに人情世態を述て其中に其の風儀
用ことを志めしるを好色またて美刺をいふ案
にあらハおすなる人をしてよくよくさとらしむ
大旨ハ婦人のためニ諷諭するものへなおのづから
をのこのいましめとなることおほし又云ふ此の世
に有し人のうへとのへて勧善懲悪をふくむる
り跡かなへとしてすすめて論淫の書とのみ見る
案ハ此等のかなりとし
こ等の説らる志かしてすすくうけるしは此物
語よりて淫奔のところハたとへれるとも以て教
戒のやうとなるべきあまりに式部をほめん
とするあまりかるしびぜをもいふなりけり
かゝる物語のさしつるとゝまるところハ式部がよせる
ものを見くらべ其の邑に云 世の上も姫冥

のみあつかへにつけて物語ハすへてかくおほし
たりこれの物語のおもてあるといとよくかき
なす縁りなそ。ゆかんすちなきさ女男のなか
ころもなくてひとねさなる所と昔の事
さ阿お保ろ出く女男ハ兄すふかるよしハ
とちるよいろなきれとれんまろこそ物なし
よきつてんのとけさハ人るにされれとき
正き入りはまとひおほろぬ正たハこのと
あつ絶まへりんかし婚男の成ま人のそこの世
るれる物語をなよしまうせぬくそえる
んつきるまのもまあるとハさかしと花にある
ねとかるをよまハありれんとさきれまれん

世ちきやとのさまふとありこハかゝる物語ハ
女子の教とふハなにでなるか子世子かゝるとも
なんりとそのれかこゝろ子ゆすしてあさるる
かとみこゝろひるつめれハ女子みハよきさるも
まきふとなりと子あめあてるすりさては敬言
戒のくめとふなりて淫奔のなかきちたるつき
るまし或ぬりかけるとおりて證とすへし
古今集并聴とのへる書子歌義の説とそ今
の弁子謝語とあるハこのあやまれるしとありて
そのうさハよ子細注さく秘蔵なりいてる人のいとく
草のなきて謝と謝とのまぎれさるをおもて
後子さるくいふハいとつてをしとときたり

葉するに万葉集古今集なとに誹諧として
て俳とうけるをなし からの書にも誹諧
といへるあり。隋書に侯白字君素好学
有捷才為儒林郎通悦不持威儀好為
誹諧雑説とみへたり世説新語補の注
にも誹諧とあり草の名より語かけること
といへるハ見かくにたがへり俳ト誹と古より
通用しきたれと事爾に少き行き
をとめのまきにめでたくとも物のあはれの六位すく
せよとつぶやくもほのきこゆとあり案に蔵翁の新
釈にハ六位宿世ともとくと調て過せとよませ
たり

按するに花鳥餘情にすくせハ夫婦の契
といへしと見えたりこれハ六位の人のひき
ゐをさきのよのすくせのつたなきによれりと
いふなれハ六位すくせといふなりさこそも
三の上にあるなれしの受領すくせやとあ
すられぬことをさしてなくとかけるも同じことを
なりあそせ考へし古訓の説ハ強解
とやいはむ
按るハ世の常にえんにすきたるものゝこにある
しらるそのきはなといひしいはめかしとあると古語
ハえにすきたるを遊とこれを解せり新釈に云
超たこのましく風流なることにてえんにすきたる

とハ忠しなる一しとして
考ふるに古注に忠とあり一し ワか紫の異本
こんかうしのずくのしるまのさうしれく志つる
やうてその国よりいれさるそこのためいてるを
すきさる紙にいれて云云とあり これとは紙
なすへし うつそなといそんハ筆のよの所しき
女ワくこそさハいへあかりぬるよにハ例あ
る詞とおもひなす 前の説耳心えかたく

こゝそ
よみきくのまにまに卯月そうりに花ちる里をたすね
いてこまへのひてむのひてよいのこゝろにもいとまなく
入て出のふとあり これを新釈にいつるハ上のことを

くしに此花散里をたつねしハ五月廿日にある
しへの此段須磨へうつりたまはんとする次に
五月雨のつれつれなるに此ときもあれハ五月とも見ゆ文字
卯月とあるハいかにそや ふと云よしなし なかん此
ふくまさるたくひすくなからす
一 栄すゝむる心とつくしの声に花散る里を
見しそてのひかるこそいとゆかし それおほやけを
そもそもなく 死せし此女におほす たてまつるにも
めつらしく此めかねとすくなくことなるさまと思し
つめのむすめなりけりさこそ君のつれつれなるころ
おほやけワさゆへしかはむ籍なるにおほしおこし
てワうりのまへりしあれハ源氏よりかへらせたまひ

て後ちりぬる星とこそいへハ五月の
比るりきてよみぢの花ぞ卯月ころにと
有をとりて記者のついてうちひらんやうに
おりかれし志ふすこれハ卯月の称子花咲
星とおもひ出めひてさて出めし道のゆくてに
花の咲ける松をみなひてまつむ花のころ
をとらせのひとるまてこの秋花ちる星へころ
ねものしこハあすこのゝち有月まありて
ふるひおもひおこして花ちる星をそころ
ねものしるへし老の末きかの花露星
もあすやかにいまあかしるとハそるやさ路
いぬ承まてとかれるハ桜チより出し花ちる星

へうよひめひしてそこはくたのひいてめしを
清めうつしとハ走るよりしらされハ古聞
の弥のてく四月五月前後のころひいそきて
ことつくしの末としかるそすみりぬ
いゆの人是をあはきをとちをとちきなとりよ
るのよあり

多武峯少将あまりにたちそきたる人
にてもこれやてきるとてきのはねあ
せぬ我をいふきぬそぬとそるけきぬへそ云
とみえていふハ法師法華宗の宇義もこの
詞ありとおほゆさらはふさくよりいひ
ここくれる事なりけり

夕ぐれの草にこほろぎとなくよりもおどろく
まくといへる事湖月抄に孟津抄をひきて
蟋蟀の事こほろぎとあるをひけり
新釈にハ抱さゝしの庭の砂こそとふむくつわと
をもこゑのかしといへるをとり

梅あるにこほろぎといへる詞にみほろきもあまた
しかありつほお須国ゆうり下に御座れ
少机姉もこほくとたふれぬと見てまるし
和泉艾草子原几のよりてこほろぎと
くさらせておとろくきさかうする 云々
抱さゝしにやりとおすあるもいとふかし
すごてめぐるやうすてあくるふるりやかまる

あしあられそさりともふかめり
こほめぐこそきるれ觚敵の草にこそくとぞ
てぞやしのいとゞいくさびよれそ蟋蟀日記
上手おしひなよりこほくとそくもとする
ひそりゑえれてあるほうきこくこう
十二支は子鳥獣の名をつけしる
子丑寅卯の十二ハ一聲にてふるくより得く
あしき志るしこれよるけめの名を配
したるハ後漢の比より王充が論衡に
も一ありて出より又陳眉公太平清話曰、十二
支所属、北周時已有之、宇文護之母與護
書曰、昔在武用鎮、生汝兄弟、大者属鼠、

次者屬兎、汝身屬蛇、又陸長源以舊德
爲宣武行軍司馬、韓愈巡官同事、或譏
年輩相遠、愈曰大蟲老鼠倶爲十二相
屬、何怪之有、これらにてかんがふに十二支へ
あけしものと所定せしとしられぬなどい
かなる由緒有て子を鼠とし丑を牛とし
たるにや、とうたがひしに法苑珠林を
見るに第四十巻に引大集經云、又此世界
諸菩薩等、或作種々天人畜生之像、
遊閻浮提、教化如是種類衆生、若爲人
天調伏衆生、是不爲難、若爲畜生調伏
衆生、是乃爲難、閻浮提外東方海中有

瑠璃山、其山有窟、是昔菩薩所住之處
有一毒蛇在中而住、復有一窟中有一馬
復有一窟中有一羊、南方海中有玻瓈山、
其山有窟、有一獼猴、復有一窟、中有一雞
復有一窟、中有一犬、西方海中有銀山、中
有一窟、中有一猪、復有一窟、中有一鼠、復
有一窟、中有一牛、北方海中有一金山、中
有一窟、中有一師子、復有一窟、中有一兎
復有一窟、中有一龍、是十二獸晝夜常行
閻浮提内、人天恭敬、功德成就、已於諸佛
所、發深重願、一日一夜、常令一獸遊行教化、
餘十一獸安住修慈、周而復始、七月一日、鼠

初遊行、以聲聞乗教化一切鼠身、令離悪
業、勸修善事、如是次第至十二日、鼠復還
行、如是乃至盡十二月、至十二歳亦復如是云
云これらの文より起りて十二支を当けられの
乃名をつけらるゝなるべし されどこの文字ハ
虎なくて獅子あり なれバ獅子ハ外国
なきものゝ虎子扇子かへつらるゝなるべし
玉葉和歌集神祇歌 子十日あまりよるとしよ
よのことわざにひかるゝ此代ハかくれさめしき
これハ正安の比賀茂社の北戸の祝さゝ子象り
て通れし さける人の夢子つけさものひらると
るんと志るせり

かゝる家の勅撰の集にいれることと不思議なる事
あるなり 此うたもたの名志るしかそへのさし
りきことゝいふる家のかみたるむをかくなる
おほゆる
むさしのゝ隅田川のほとりに橋場の里といへる
所あり 此所むかし橋のありしあとなりといひ
つたへたり
業平の夫木集に康元々年康勝社
に詣けるにすみだ川のわたりとこれハかの里
り今ハきこえしをつたへたれバ
光俊朝臣
すみだ川むかしハこゝに橋ありとこれハ名をとゝめ

むしのあるよしなりけり
とよするなり今の楊場の星ハ此名をとりて
徴とするなるへし
宇治拾遺物語ニ今ハむかし簺云といふものよ〻
有けりけすの家ニ入く人もなかりけるをとりと
こらへて入たりけり諸ニあるまゝをすくひけり後ニ家
あるじの女きゝつけて大路のまよりまてられそ
かくすなひくるそいけにかくてもなき所に入て
かくハすなはちをとめぬるそあなうさて簺云こそ
いましけれさるハ家よきめくとひけれそ
むかしよりあるさくわるひとそ此世物とそ
すらふそれなる

この簺云といつる人ある相云利口よりてその
ことよき志られけるなるへし今仁和寺蔵書
目録ニ簺六傳といふもののあり将門ハこれなと
よりて射られけるとよきしもこの簺云なる
よし保元平治物語ニ見えたり
いせ物語古今集ニすみた川を注していはくすみた川
ハ武蔵古今集ニ志るされハこ(武蔵)なるともくるれも人
もなかりしとさるるを更科日記ニかつしかの国と
むさしのさかひにてふとゐ川といふなかれ里
のしもにありて云云 此山古今集秋の中をながるより
外のところて武蔵とさらしとの中ニありてあなる
川といふ在五中将のいさことゝはんとよまれけり

なり中将の集にハすみだ川とあり二所なく
わたりぬれバむさしの国にあらぬ云云といへり
こハ両の国の境なる中にせし土人の云傳
ふるハ大方よしあしの傳ふるなり又京人の口傳ふる
も必よしともいひがたし又いとく古よりいへる
文科日記のごとく此文字もまたハむさしの国とし
むさしのあそびる所あすだ川と有つれんと後人
古今集の詞書によりてむさしと下つふさの
あそびとふ改つるにや此文字むさし下つふさの
云云とあらむさハいふてかの日記に志りかく計歴る所
ところのついでによる所もむさしにハ筆へてる垣とせる
すし日記のごとくなれんと見えたとあり

按るに古写の本にハ世にある所の印本
の文科日記なるべしそれの藤書に萩原
宗固といふ人の自筆にて校合せるもあり
それハ古本にて所をほせるもとりて
ありいふことに云べく
』そのつとめてそこをたちてむさしの国とむさし
しのさかひまである大きなる川を下つ武蔵中将
のいきてとふとあるいつりなり中将の
集にハすみだ川とありかくもまうでさしの
よりの便に二中りて夜ひとよ舟そこかめ
あるてわかす云云路山芒荻のなかをつく
るよりほかの空をなくてむさしとさくしの中に

ねてふとね川といふ所にてわたりぬれてさらに
の国にうつりぬ
かくあれども印本にハ大にたがへり此たびにあまた
ふた川とあやまれるなれバ今もかの
わたりのものにすゞとよぶ所ありもし
あづま人のひがひがしき口つきにハすんぶ川
ともいひつらんを旅人ハすゞ川とききあやまらん
さて古本にハむかしとさうしのさうしにある川
ハふとね川とありてあすか川にハあらず印本の
更科日記のあやまれるを見て訛とあして古今
集伊勢物語までもとみなしるしたらんを
にいつるハ一冊の過失なるべし

割一本作
間

俗間にこれ小判ことこれ小判なといひて形をさ
黄金をそいとひきふひてこれをとゞむおほやけ
よりこれを割しのへとさしまゐらせてまゐらし光錘ハ
形の大さをそろへてそのきろとをとりて形あるをきらふ
かふることをとゞめり老るに銭あまた嫌あるといひきらふ
ハふるきあしひありしわりける

三代實録第十一貞觀七年六月十日乙未禁
京畿及近江国賣買之輩擇弃悪銭同弘
仁十一年六月九日下知大藏省日鑄銭司所
進新銭雖文字頽不明而不失體勢亦有
小疵行用無妨宜揃擲納而闇愚者不怗
此旨専任己心擇弃不受或稱文字不全

計十嫌二三或踰輪郭有缺犖百欠八
九是以要升米者飢口難餬貫色綿者寒
身不暖宜牒于路頭厳加禁止若有乖違
随即変容とみえたり

十訓抄に云昔元正天皇の御時美濃国に
貧く賤き男ありける老たる父をもちたりこの男
山の草木をとりて其直をえて父をやしなひ
けり此父朝夕あながちに酒を愛しほしがるこれに
よりて男なりひさごといふものを腰につけて酒を
うる家に行て常に是を乞て父をやしなふある時
山に入て薪をとらんとするに苔ふかき石にすべりて
うつぶしにまろびたりけるに酒の香しければ

打ふしたるにあやしくてそのあたりを見るに石中より水
流出るそのいろ酒に似たりくみてなむるにめでた
き酒なりうれしくおぼえて其のちは日々にこれを
汲てあくまで父をやしなふ時に帝此よしを聞召て
霊亀三年九月に其の所へ行幸有て叡覧しけり
是則至孝の故に天神地祇あはれみてその酒を
あたへ給ふと感じ給ひて後に美濃守になされけ
りけり其酒の出る所をば養老の滝とぞいひける
よりて同十一月に年号を養老と改められけり
この説妄誕のやうにきこえ侍れど続日本紀養
老元年霊亀三年也八月甲戌遣従五位下多治比
真人広足於美濃国造行宮九月丁未天

皇行幸美濃国云云甲寅至美濃国東海道相摸以東東山道信濃以東北陸道越中以東諸国司等詣行在所奏風俗之雜伎丙辰幸當耆郡多度山美泉賜従駕五位已上物各有差云云十一月癸丑天皇臨軒詔曰朕以今年九月到美濃國不破行宮留連數日因覧當耆郡多度山美泉自盥手面皮膚如滑亦洗痛処無不除愈在朕之躬甚有驗又就而飲浴之者或白髮反黑或頽髮更生或闇目如明自餘痼疾咸平愈昔聞後漢光武時醴泉出飲之者痼疾平愈符瑞書曰醴泉者美泉可以養老蓋水之精也寔惟美泉即合大瑞朕雖痛虚何違天貺可大赦天下改霊亀三年為養老元年天下老人年八十已上授位一階若至五位不在授限百歳已上者賜絁三疋綿三屯布四端粟二石九十已上者絁二疋綿二屯布三端粟一斛五斗八十已上者絁一疋綿一屯布二端粟一石僧尼亦准此例孝子順孫義夫節婦表其門閭終身勿事鰥寡惸獨疾病之徒不能自存者量加賑恤仍令長官親自慰問加給湯薬亡命山澤蔵禁兵器百日不首復罪如初又美濃国司及當耆郡司等加位一階又復當

春郡耒年調庸餘郡庸賜百官人物各
有差女官亦同癸丑授美濃守従四位下笠
朝臣麻呂従四位上云云十二月丁亥令美濃国
立春曉挹醴泉而貢於京都為醴酒也
されハ此時孝子の美濃国にありし子ハあらまほしき
老といふ文字ハ節孫去にみえたるをとりて年号
とハなされめのにやしらし人ありて老人といへり
やしなひまゐらするにハあらずやまして此比ハ孝子
烈婦のためにハあつくめぐみ給ひしのみぞ史字
老ぬるまでハのりをまもるときこそ十訓抄の名
いふぞ国史とよせまつりしふミきこゆるとも
本居たかにいへる学あるの子云侍るといふ

詞ハつゞきて文とつゞきたるにて文とありとかきたるハ
いふきこえし此詞ハ人と人とかゝる類の内にハいく
つともなくかきたりておほく有てくだ此の御
又ハ命ありてよりて母なる者奴僕なんど對していふ風
なども千八一も有てなるし 云云
老たる子これハ理あるかたくおほゆるさまとゞ
子此のしかなるふつこなふハふつゝかなれと
ひとつふたついひし業をも御月の暮の其子
おほんおほへてひとつおそりみれとさきへ
侍りしまゝ宮居の其子あいなのさかしらやかと
そ侍る又携明其子故の人のめでしまたる子
悟いふなるおりひさしく侍るを又山路の等

といへるハ初にいへる竹とり物語に
なよ竹のかぐや姫とつけ侍るといへる後
の物語に侍れバ物語にハさる詞あまた書つけ
たり　紫式部か日記にハてる子あまたふるゆゑなり
らずとつゝめる人の書たることなるをもせんやかの
人の後に初撰にえらびても詞に侍るの字
を用といひしことも勅撰なるにもあまたの
の集にあまたより書たるにも六人集
なとの物にもあまたみえて式部か日記と
すべて物語にみえぬ文字ハ侍るとかく詞つ
くひともくはしきことや物語ハ比と侍る
わりにしたるかもの字ハ侍るの字すこし詞の末

にハあまたつけてをりいふのさるかくのうへ
かのこ姫とかな字をつゞるなとも詞なき
かくむかしハ例あれバ跡なるべし　かの人の説ハ一
概なる論といふべし
世俗に思ふところをとゞこほるをいひまさにつまる
をかくさぬことをあらさまといへり
日本紀巻の六垂仁天皇の條に俯仰噢咽
進退而血泣日夜懐悒無所訴言とありて
懐悒の二字をいきどほると訓せたりなげく
ことありさふらハいきどほるといふかれひいふもを
むつかる侍るべし　又あつかひといふ詞ハ神武
紀に僾忽の文字をよませてむぞうの事とかふ

てらし或ハ明狭間とかきて日光の隙
をとる窓なるをいへる詞にして今の俗に
いふハ大まどなり
新采の加久葉子又もこの源のこ母の花より下ニ千
なかしうちとけぬるをいとめでたしとかくて
まうり路てもこよなきハおほしよりて女まそこそや
といろめきたる心にハありしす 竹取の隆子 細流に
是も女子なりて源にむかひささとしとあり 孟津
にも源のうたがきつきて好色の心より出なりて
見なさることと書るなり

探するをとこハ女子なく婦れハ浮ねかへ蛛
たひてよろつをて恋さへあるなるを是ハひき

久しうしくなつかしひなる心深すれハ女をもいとまで
し女まて見そてまうりても上の思ひるゝまへしとの
ますなるまへしいうよりいろめきたる心ならずも
らうし女まなりにけ人にむかひてさしとおほさ
あやて細孟とまてまうしき宗説なる一
巴女子源氏を女のしてここやとさしとかゝるを
まつ原き説なり 紳の書に子黄蓋の尼子
なりのりんとて冷泉院へまゐりまうす御子次家
後の御子ちとあげいつまて和子おとなびてまうす
にたびかの御気をぬきす志まへり此この主と
しれてうちのこうちくるしてこそくめなる侍り
うつらきハ女らく見るてまつらまほしく

こよひかりしあるをとりてこの解のあやまち
をさるべし絵合草子の出せる毎ハ女まで
うるてまつほしきとあるもおなし

鞴

和名抄に唐韻を引て鞴韋嚢吹火也と
ありて和名布岐加波とさへ作り今ふいご
とよぶハふきがハとよこなまりたるにて又鋸も
和名能保岐利とあり今ハのこぎりとよぶなる
木天蓼を和太々比と訓せりいまハまたゝび
とおなじていへりかるき新撰おほきなし

きんち

これハ物語あまたしるせし沙とゆるなし

とおもてゆきなとゝいふなるまで沙とこきんち
といふなるやたしかに泥し付たる物をこそ今
きなるりくハきんぶちをつめくこきんち
といひけるやと物ハひくそなへり

のろし

こゝろたえて人をとさて後撰集のろしといへり
これハぬるしの轉なるやと見ゆる草紙
上手集花の出当家のなるとかゝる本に
かく見ゆるなまでたれしそまつりぬかん
のぬるさをそうしくおしまくらきなるを
あやい母ののろしといふなるちくあそれり
ゆふ顔の巻にいりぬれハ火とりちかつけて右近ハ

屏風へよりてふしたる首を満月が子孟虎
あかとひきていへるハ源の御出によりて火をとり
のけたることをいへるなり
これハ穏なる酒をもおもひ出を源氏のいふも
みるとともに火をとりのけたりとするなれバ
て太道かられたはかりとなることハここにハ源氏
のいへるも君が入せまつる夜にさハなくて太道
も外の事をおもひしたるとこをそへる法師もさハ
ことなる念佛たてまつるにかハりてこれこそなり
太道のしひたる時人にはまれむかしをあはれなるよし
屏風へよりてふしたるをいへるなる独を
かくつきを火をとりとるかく捻くるひて説をみ

たる物と見ゆ
太宰子が拙詩に仲麿が明州にて詠じける
いふなるあまのはらの歌ハ盛唐の絶境にして李太
白が山上眉山月の詩と同格なるべし定家卿
まのそれと改られしハ足らむ云々とあり
考ふるにあまのはらの歌ハ土佐日記にあまの
はらふりさけみれバとあるをいふとなり
ていへるや古今集羇旅部にあま
のはらとありしハ定家卿のあらためられしにハ
あらず百人一首にあるものにしとあるより定
家卿の改られしとなりて古今集をもて
改られしハあやし

因人の古文孝経の序に幸孔壁古文孝経并
與安国之傳存于我日本者寧不知珍而寶之
哉とあり
案するに孔壁の古文とかれしハいかなるや
おほやけ皇朝につたはる孝経いかにへの科斗
のまうさるものなしことさらに世にある
今の孝経に章ごとに名をつけたるも
他経に例もなくいかにさかしらに漢の代
の人のつけたるならんとおもはるる孔傳といふも
もかしこにてもたえてより経にまゐれる人もなく
より皇朝にて詔ありてこれを禁しめつると
もありしとかの序に清和帝の制詔を舉

いできるハ國史などに見えずやなほいまこそ
書つく三代實録巻之四貞観二年十月十六日壬
辰制哲王之訓以孝為基夫子之言究郎
性盡郎知一巻孝経十八篇章六籍之
根源百王之摸範也然此間学令孔鄭
二註為教授正業一歟其學徒相沿盛行
於世者安國之註劉炫之義也今案大唐
玄宗開元十年撰御註孝經作新疏三巻
以為世傳鄭注比其所注餘義理專非又
稽之鄭志康成不注孝经安国之本梁乱
而亡今之所傳出自劉炫事義紛會誦
習尤艱靡歟衆止更招疑義故玄宗廣

酌儒流深廻慮想爲之訓注冀闡微言
即勅学士儒官僉議可否於是當時有
識碩德名儒咸集廟堂恭尋聖義妙理
甚深常情難測同共嗟伏服請頌傳侍
中安陽縣男乾曜等奏曰天文昭爛洞合
幽微望即流行佇光來葉制曰可然則孔
鄭之注並廢於時御注之經獨行於世而
唯傳彼注未讀件經儆之通論未爲允
愜鄭孔二注即謂非眞御注一本理當遵
行宜自今以後立於学官教授此經以充
試業庶革前儒必固之失遵先王至要之
源但去聖久遠学不厭博若猶敦孔注

有心講誦兼聽試用莫令失望とあり今
世にある本の孝経あるは孔壁のまゝなるかなき
んや唐の此あらざりきこえたるに論なきなり
年山記聞の中に安積先生の常照寺藏千字
文跋をとなへりその文に夫千字文梁武帝使
周興嗣編之以教諸王之書而百濟王仁所上應
神天皇者也皇朝文學之興實基于此とみゆ
今考るに二の文いづれも誤なる二れハまさく
古事記によりてかかれたるなるへし されと應神
帝の十六年ハ晋の大康六年にあたりて
梁武帝よりハ二百余年まへなるをやされと
古事記に千字文と志るせるハいふかしきさる

てくされも淳化帖に漢章帝の書とて
載たる文をあやしていへるハこのたるものなしとも
おもへる欧陽公の説にそれも羲献之より前既
ニありといへり安様子の文のてくみくハ梁武
より後王仁来て応神帝にまゐりしと
学べく年代あなせりさる時織の影も
ふとおもひよくてるてあるもち千慮一失
といふへし

いかのぼり

都人ハいかともよび関東人ハたことよべり形の
烏賊魚に似たれハなりふさき絵ハ是を
より近古西川祐信がえがける鶏なる烏賊

魚のかたちをり関東ニて章魚といへるも
足のおほける物なれハ志かよへるなるべしいかへ
ニ師労之とよめるよし和名抄ニみえたり
風箏紙鳶なとかいふもの文字もみえたれハ
人手のとびこことしよ物ハ唐のさ時をとりて
つくれるなるへし

淨

俗語藪といへる書に淨をさうけと訓せり
大こよぶよ淨ハ戯場にてあるくこそし
ゑと唱ふるものなり実雲長髯なとを淨の
つとむるとてくし清の康熙帝の時右の聯ニ
恭操ハ丑淨とあるにても知るべし

水滸傳
宋江ハ仁智の長者めかしく賤しき行ハ様子
ことより出たる人の志行なりとしるすと
金世歎が評にも志して宋江を姦智の大賊と
志るし侍るハことわりなし宋史にみえたる
淮南の盗宋江ハなくもなし水滸傳にある
ことなくはなくもなきりのさわりも世歎が論ハ
還道村にて宋公明三巻の天書を九天
玄女より得るといへるハみて説たるそれらの
かの説のごとくならハいかにて天女のたすけあらんや
作者の本意ミえるなる評なり
東海談にあるへしといふ書ハ赤城翁の著語なり

赤標の学者の假字の外紐を嫌て可成読と
あらためなげしハさらに文言なる学者多くその
鉄面を見ることなりけらし又奈流退志とせるハいよく
文言なるあるなる傳一とくなる云
按するに可成と書るハいかにあふかの奈流退
志とかけるハ假字なれハ今はかくすこしもと
文言なりといひし三代實録十三に依此天早
災彼所致奈留部之とある類をも知るしと
せしや此後の假字ハ此この等の類なれハ此にを
眞字にかきて文言なりとて知らめ須ふ
つきてとらは
同書に云伊勢物語に春日の里に知るよしして

かくていふより此物作の作者知の字義をしらさる
なるへし中華の書に知ニ表ヲ別ニ知ニ違別ニなとの知の字ハ
つかさとると讀なり知行所當の知もしるとよみて
まあすつかさとり行ふなりと云
考るに己か領する所をしるといへるハ我国の
古言なりさるをいま物作の作者の知の字
義をしらさりしといへるハ無言なるへしさる
といへる詞ハ此物語にもかきつけたるのほかにも
あまた見えたり古事記日本紀萬葉集なと
に所知大八嶋国またハ御八嶋国なとあまた
見えたりこれらをしろしめすとよめる故
こゝろつかさるまやしろしめすのしろしの反りなれ

バしろしめすといふをしるなり荘園の地なとい
しるところといへるを論する皇朝の古言に
うとき人のこゝろにて古人をそしれるなるへし
かゝることおほかり
同書に本田善光といふ人ハ難波の堀より出生
せさる人なるか何ものゝ捨児か寓言せしや云云
案するに推古帝の時本田善光なと名のる字
人のあるへしといふてハたれもしれることなし
難波の堀より出生せさる人ともいひかたし本田
善光といふ人善光寺の如来を供養し都
にのほりくれるを足利の末の時ありける
ことしるしたるに古今著聞集の詞なとを書て

ありしか今ハわすれたり
本居なにかしか玉かつまといへる書に東濃とかきて工藤庄司景光著佐與美水干一とかけるをみ
今の世の布に細目といふあるハ此さよみの訛なる
ことしるなり
案するにさよみの布の出所に東濃といへるハ
いふならむ和名抄に貲布唐韻云帯布名
也漢語抄云佐與美乃沼能とあり和名抄
・とみの人をとらひける人のかそへりのことを
見すれハ知れ知すたゝぬことなり
同書云孔丘ハ名をたゝすこそいふよしハ
さわれこの名を此の縁にて為すといへるをとのへ

つとめありける中に地の名なることからめかすへく
のつもつめもかてもくにまかせて地するなれハおなは
つとろかるゝきをおほやけさ海にあつかれるなき
ねとゝめもとさるにワくらのくにまかせてうつるに
あふらめ宮くく書なるハいともく可畏ワさるなり
すや　続云
續日本紀稱德天皇神護景雲二年七月
辛丑大學助教正六位上膳臣大丘言大丘
天平勝寶四年隨使入唐問先聖之遺風
覧膠庠之餘烈國子監有兩門題曰文宣
王廟時有國子學生程賢告大丘曰今主
上大崇儒範追改爲王鳳德之徵于今

両一本作西
賢一本作賢

至矣然准舊典猶稱前号誠恐乖崇德
之情失致敬之理大丘庿闈聞斯行諸故
陳管見以請明斷者勅号文宣王まうし
學令子凢大學國学毎年春二仲之日上
丁釋奠於先聖孔文宣其饌酒明衣所須
並用官物とあれバ皇朝にてすでに王号
をたてまつりしをしらるべし　関東の御
たちてまも廟堂いとさしつくらせたまひて京
都のごとく釋奠のまつりきこえさせたまふ
文宣王とありそいつきまつりもてはやするといやし
きはより孔丘なとよぶハ何ぞやかの翁の
いつくおかやけき御子あつかへるかりきゑども

さきくはへらのんにまうでてらうあく
しかも定て書をと儒者をとりやさせたれとおのが
すこしおほやけさまの定をとやかくなるあり
すやすべてこの翁のつくれる物にハ聖賢をた
ふとも儒者をといかしらんとのしするを
けそくしもり真暦考ならびにしきもつまほ
しかる書もよむにしくさる雄説をも出しより
神児源くらむかのハゆかかる人の説に依よ
ふでとるれ
源氏物語ゆみのほのまき花に椎本の物ごころそれ
くらたこるに山の雅をあるなかりしともも
おとなとしあり

業するに折子この家の出せをあけてるによりて
出てもやとなりひとする子こみ伝にうる物語を
よめる子さえぬひふきの書子をまるなあてさうき
そのうとかそしこそめられそやれる人々そ
まとぬせりれるといふる家の書子いるのみあり
印本のうる物語ハ冬家の一くひとつをみ
うきて白ともあやまりてそするなり
まつむ花の書子すこしさしいそくかとりふし
あるよかりしつき二度れいてきるほどいとあてし
をひろほりとこいそくらん時しお庭されてうし
ひきさあけまてりいをとりうしあこうすあけもそて
おりでいふとあり　湖月抄にをひろ巻ハ末摘の執

の生直りなりんを見出さらん時られしりらんの心
としそるなり
若るる光君の末つむのりく名ひきかむし
ハ八月廿よ日と云子見そう後子こみ伝いまき
の陸とすくてそ時しれもけるといつるハ
朱雀院の行幸の己とまて十月そりのこと
まりてもあれハ十月より後いま正月ほのす
まやうらさけるる正月庭のほとをやそう
入るあひてとうけるもみ地のするて二ハ
るねりのそよ冬とこ若子いりておきそると
あれそ末つむくよれしあくるを一月みとる
一ノ見るるけるるか度るるの日出すくる月子

生るほりゐりんをあるつゝもあらず二れを
ちひておひるほうと釋えそハ通せぬやうく
いはむるにおいるほりまて起るほるまハあらずや
おきるほるねるほるるとふ今もいふ狐なり
こゝハまつむのうごいふしぬくるゝと源の必然
ありてけし起出りよりん附ハささきのをせるなり
なするすることけしからぬ鼻のさきなるもいちえる
うふんとおほされて格子ゝりあげぬくりしら
ささきのよのおこりおほし出られてあやしも
て服れくをおそことにおちけてこんなれ
日の光をといれまくるするつしまをハおぱなほ
りなまで書くありしをだぴと選りらつ

しらさる解をもなせるならむ氣

蛾術齋慢筆三巻あり　下巻ハいまた稿成
從已中巻ハ御しの孫子借おせられ原本
今ハ外にて故紀ゆ出る故よしえう神巻一冊を以
えて膽写平

寛政九年丁巳季月廿四日瀧澤解書於曲亭
牕下